

個体的意識と生命の持続について ——『創造的進化』の創造について——

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学
中根 弘之

0. 序

『創造的進化』¹においてベルクソンは、「意識は人間において、人間においてだけ自己を開放する」(EC 719)と述べている。ベルクソンによると意識は、人間以外の有機体において、自然の決定性の網の目にかからめとられて眠り込んでしまう。人間を除いた有機体に意識が存在しないように見えるのは、意識を持っていないからではなく眠らせているからだ、という訳である。ベルクソンにとって意識が目覚めることは、意識が目覚めた存在が生命の創造性を発揮することに他ならず、それゆえ「人間は進化の《終端》にして《目的》」(EC 720)とされるのである。

このよく知られたベルクソンの主張に、我々は一つの疑問を投げかけることができる。それは、進化の意義についてである。なぜなら、ベルクソンは、「よりよい語がないないので、私はその原理を意識と呼んでいた」(EC 696)と言っているように、生命進化の根本となる原理を意識であるとしていたからである。つまるところ進化の意義は、人間において意識が自らを取り戻すことに限られてしまうのだろうか。そうであるとすれば、なぜ生命進化の過程で人間以外の有機体を生み出す必要があるのだろうか。仮に進化に意義があり、進化の過程で他の有機体も生み出される必要があったとするならば、最初に措定される意識と人間において目覚めた意識は、同一のものであることが許されないだろう。この生命進化の根源にある意識と人間の意識の間の差異はどのように説明され、生命進化にはどのような意義があるのか。本論は『創造的進化』の進化の過程をたどり、意識の人間における解放がどのように生じ、その意識と進化の源泉としての意識の差異について検討するものである。

キーワード：進化、創造、意識、知性

1. 生命と物質の傾向について

ベルクソンは『物質と記憶』第四章において、持続を個人の意識状態に関する事実から全ての実在に妥当する事実²に拡張している。もともと持続は、『意識に直接与えられたものの試論』（以下、『試論』）で検討されたように、過去と現在が相互浸透し、一つの質的多様性を形成している我々自身の意識状態の事実³に他ならない。それが『物質と記憶』では、より緊密に過去と現在が相互浸透する「収縮」と、反対に相互浸透の度合いが低い「弛緩」が取り上げられ、意識の諸活動に焦点が当てられる。『物質と記憶』の第一版序文で主題となるとされた「意識の諸平面」とは³、この「収縮」と「弛緩」によってさまざまに展開される「持続のリズム」によって我々自身の意識的活動が様々に展開することを指示しているのである。そして、この我々の意識の状態を叙述する理論が知覚理論を通して、諸実在のありようにまで展開され、宇宙に存在する諸実在の差異は持続のリズムの差異として理解されることになるのである。

例えば、赤色光線は、我々にとっては質的な色の知覚としてとらえられる。しかし一方で、赤色光線は、量的な電磁波の莫大な数の振動でもある。我々は、赤色光線の莫大な数の振動を自身の持続のリズムに合わせて「収縮」してとらえることで、赤い色の知覚としてとらえているのであり（MM 340-341）、我々が実在の世界に見出す質と量、延長と非延長、必然と自由という対立項は、持続のリズムの差異によって解消されるのである。

『創造的進化』は、この『物質と記憶』の結論を発生論的に検証し⁴、展開している。有機体の進化は、様々なリズムを持つ持続の発生に他ならず、異なるリズムを持つ実在同士が干渉しあうことで、新しい持続のリズムが生み出される過程なのである。その点で、『創造的進化』の根源には、様々な持続のリズムを生む大いなる意識の持続が何よりも先んじて存在していなければならない。

生命の根源にあるのは意識である。あるいは超意識 *supraconscience*⁵ といった方がよいかもしれない。意識ないし超意識は、花火 *fusée* であり、その燃えカスが落ちると物質になる。（EC 716）

そしてこの生命の根源に置かれる意識は、 $\dot{\cdot}$ 一つのものであることが注意される。

この観点から考慮された生命の進化は、一つの確からしい観念に進化を包摂することができないとはいえ、より明らかな意味を持つ。意識の $\dot{\cdot}$ 一つの大きな流れが、物質の内に浸透し、全ての意識と同様に、相互浸透した潜在性の莫大な多様性をため込んだかのように、全てが進行する。（EC 649、傍点は引用者による。）

後に『持続と同時性』でベルクソンは、相対性理論に抗して実在的時間の唯一性を主張しているが、それはこの『物質と記憶』以来、『創造的進化』を経て継続して深められた持続理論の展開ということができる⁶。一つの大きいなる宇宙論的意識が宇宙全体に充溢し、その元で「発明、諸形態の創造、絶対的に新しいものの連続的生成」(EC 503)が生じることで我々の宇宙に様々な実在が生み出されたのである。

以上のようなベルクソンの宇宙論的持続理論において、物質の持続は、本来的な持続の「中断 interruption」(EC 666)、「反転 inversion」(*ibid.*)したものであるとみなされる。なぜなら、「弛緩」のリズムを持つ物質は、過去と現在の相互浸透が弱まっていく働きであり、持続の本質である質的多様性の解消に向かっていくからである。狭義の持続とは、物質の持続が持つ「弛緩」の傾向とは逆の「収縮」傾向にある生命の持続であり、意識と生命が等しい延長を持つとされるのは、こうした事態を受けている。確かに、生命全体を意識的な存在とみなし、持続するものであると考えることに我々は少なからず疑問を抱くだろう。大脳のような特殊な神経組織を持つ存在にのみ意識の活動が認められ、意識の持続が認められると考えることには十分な理由があるように思われる。事実、のちに見るように、神経組織の発展と意識には重要な関連性があることをベルクソンも認めてはいる。しかし一方で、ベルクソンは大脳のように高度な神経組織がなければ意識の活動が存在しないという説には断固として反対している(EC 588-589)。有機体は、どれほど程度が低いものであっても、意識的持続本来の働きである創造を行う存在であり、「物質の下る坂を上る働き」(EC 703)をし、「物質をわがものとしそこにできるだけ多くの非決定と自由を導入しよう」と(EC 708)している存在なのである。有機体は、過去を現在に浸透させることによって、常に新しいものを生み出す「生の躍動 *élan vital*」(EC 710)の成果なのであり⁷、同一の行動を無限に繰り返す非有機体とは根本的に区別される存在なのである。

その意味で、意識の目覚めとは、単なる自己意識の発生ではない。意識の根源は、宇宙的意識にあるのであり、人間において目覚める意識とはその意識とその起源からして本性的に連続しているからである。しかし、連続はしているものの、その同質性を強調し過ぎることは誤りであろう。仮に、人間の意識と宇宙論的意識が完全に同質のものであるならば、進化の意味がなくなるからである。それはつまり、数億年の生命進化の過程で意識が有機体を生み出し、さらにそれを進化させ、人間においてそれを再び目覚めさせる働きが、閉じた円を描き、同一のものに回帰したことになる。「時間の経路を進みながら引き入れる持続によって絶え間なく膨れる」(EC 496) 持続の本質から、同一のものへの回帰は認められない。仮に必然的に回帰するのであれば、「扇状に一挙に展開することができる」(EC 503) 物質的な宇宙像と何が異なるというのだろうか。宇宙論的意識と人間において目覚めた意識は、持続するという点で同質であることは疑うべくもないが、生命進化の歴史分だけそれは差異を持つはずなのである。

2. 有機体の進化

それでは人間の発生までの生命の進化をまとめてみよう。宇宙論的持続は、まず相反する二つの傾向を持つ持続の接触から始まる。

実際、生命は一つの運動であり、物質は反対の運動である。そして、この二つの運動はそれぞれ単純なものであり、物質は一つの不可分な流れであり一つの世界を形成する。同様に不可分である生命は、物質を貫いて traverse 物質の形成する世界に生命存在を切り取る。この二つの流れの内、第二のもの【物質の流れ】は、第一のもの【生命の流れ】に逆らうが、第一のものは第二のものからなにがしかを獲得する。その結果、二つの流れのあいだには、**暫定的な共存形態** *moudus vivendi* が生じ、これがまさしく有機化である。(EC 707 【 】内は引用者の補足。)

ベルクソンは、「生の物質 *matière brute*」(EC 521) と呼ばれる、「弛緩」しきっていない物質の持続を生命の持続が貫流することによって、有機体は現出するとしている⁸。権利上、「仮に生命が純粹意識か、あるいはより正しく言って超意識であったなら、それは純粹な創造作業になったであろう」(EC 703) と想定することは許される。しかしその場合、生命の持続は、物質的世界に何も生み出しはしなかったろう。生命は、事実として物質との「**暫定的な共存形態**」をとることで物質的世界に働きかけるのである。

こうして生み出された有機体の進化についてベルクソンの主張の特徴は、分岐という発想を用いるという点である。カノン砲から発射される砲弾に対して、生命は「榴弾 *obus* の類のもの」(EC 578) に属するとベルクソンは考える。榴弾がそうであるように、一度爆発して破片になっても、それ自身がさらに爆発して破片になり、無限にその分岐が進んでいく。生命の持続は、内に含んでいた「諸傾向 *tendences*」(EC 579) に従い絶え間なく分岐した結果、様々な有機体を現出させるのである。そのため、生命の多様性の統一は、「衝力として初めに与えられ、引力として終端に置かれていない」(EC 583)。分岐の結果として現れる有機体の多様性は、調和という目的を最初から持っていたわけではないのである。その点で、結果を想定して立てられる目的論は、ベルクソンにとって批判の対象となる。ベルクソンによれば、進化の過程で有機体がどのようなものになるかについては、進化が始まる前の段階で決定されていないのである。しかし、ベルクソンは同時に、突然変異を駆動力とする機械論をも批判し、行き当たりばったりに進化が生じたことを認めない⁹。有機体に有利な形態の変化をもたらす突然変異の莫大な数の偶然の連鎖を想定することができないからである。ベルクソンにとって有機体の進化は、一つの「生の躍動」が、絶え間なく物質の持続という障害を乗り越えながら、様々な姿を示していく努力の産物である。その最も端的な証拠が、まったく進化の系統が違っているはずの脊椎動物の目とホタテ貝の目に見られる構造的

類似に他ならない (EC 548)。観察可能な事実として見いだされるこの事例は、全く異なる進化の過程にある有機体であっても、もとの「生の躍動」が同一である限り、同一の構造を現出させることに不思議はないことを端的に示しているのである。

しかし、この有機体の分岐は、必ずしも試みを全て成功させるわけではない。なぜなら、創造に向かって歩み出したはずの有機体が「進化の途中でしばしば自分たちから抜け出し、自分が生んだばかりの形態の上に眠り込む」(EC 583) からである。「進化は前進運動ばかりではない」(ibid.) のである。事実、単に環境に適応する¹⁰というだけなら、有機化を成功させた原生生物の現出で十分であるかもしれない。数億年も姿形や行動様式を変えていない有機体も事実存在する。しかし、「生の躍動」は適応に甘んじることなく、生み出した有機体を乗り越えて新たな有機体を生み出そうとする。なぜなら、決定された物質の持続に自由を挿入し、新しいものを付け加えていくという根本的な生命の目的達成のためには¹¹、物質と単に共存するというだけでは不十分だからである。

事実、原始的な有機体は、その状態に甘んじることなく「生の躍動」によって植物と動物に分岐する。「大気や土や水から直に鉱物元素を吸収し、それを費やして有機物質を作り出せる能力」(EC 586) の傾向を持つ植物に、一見して生の持続や意識の働きを見出すことは困難かもしれない。しかし、物質のエネルギーの拡散を抑えるという働きに特化することは、そのこと自体に意味がある¹²。加えて、植物によって込まれたエネルギーは、より運動的な動物にとって不可欠なものであることも注意が必要であろう。事実、動物は、直接栄養を作り出すことができない一方で、我が身を養うために有機物質を作り出した植物を食べたり、植物を食した動物を獲物にしたりするため「空間内での可動性」(ibid.) を一般的な傾向として持っている。そして、動物が持つ「運動性と意識のあいだには明白な関係がある」(EC 588)。この意識的であるという点で動物の方が植物より優れて創造性をもたらす可能性があるために、生命の目的に近い存在ということができよう。動物は、「できるだけ多量に蓄積された潜在エネルギーをある解発の仕掛けによって爆発的な行動に変換する能力」(EC 597) を持っているのである。しかし、それでも多くの動物は、進化の過程で「麻痺や無意識」(EC 591) にとらわれて、意識を目覚めさせることができない。なぜなら動物は、四つの傾向に従って進化を続けるが、「四つの主たる方向の内、二つは袋小路に突き当たり」(EC 604)、残り二つに進んだものでさえも、本能という傾向性に従って行動するように促されてしまうからである¹³。動物は、本能に従うことによって定まった刺激に対して正確無比に反応するように仕向けられ、より環境に適応していると言うことができる。しかし、どれほど複雑であろうとも、本能によって解発する行動は、意識的なものではないことに注意すべきである。人間の習慣的行動がそうであるように、本能によって解発される行動は、無意識に実行されるのである。本能に従って行動している際には、いわば一定の「行動によって蓋をされた」(EC 617) 状態に動物は置かれてしまい、意識を目覚めさせることはないの

である。

3. 知性の特殊性

意識の目覚めに必要な契機は、知性によって有機体に与えられる。ベルクソンによれば、知性はもともと本能と同一の問題に対する回答であり、有機体の行動を決定するための契機でしかなかったという。

本能と知性は、それゆえ、ただ一つの同じ問題に対する、分岐し、等しく洗練された解答を示している。(EC 616)

ここで有機体に与えられる問題とは、有機体一般に課せられている課題、非有機的な物質に対する対処行動である。本能と知性は、この課題に対して異なる解答を導きだし、その結果として本能が意識を眠らせたのに対して、知性は意識を目覚めさせる。そして、知性の活動で注目されるのが、「道具 instruments」(EC 616)を使う、あるいは作ることである。本能と知性はともに「道具」を使い、あるいは作るが、本能が自分の身体や他の有機体の身体といった有機的な対象を「道具」とするのに対し、知性は非有機的な対象を「道具」として作り、使用するという差異がある。

それでは、非有機体を道具として用いる時、一体どのような特殊な契機が導入されるのであろうか。それを端的に言えば、行動における知の不足である。

反対に、知性的に製作された道具は不完全である。それは努力を払ってしか獲得されない。それはほとんど常に骨が折れる操作 *un maniement pénible* を要する道具である。(EC 614)

一見して奇妙なことだが、知性のもっぱら「製作する *fabriquer*」(EC 625) 能力であり、「道具」を作る能力であるにも関わらず、十分に使いやすい「道具」を提供するものではないことが注意されている。「細部の無限な複雑さと機能の不思議な単一性を兼ね備え、望まればすぐさま難点もなく、驚くべき程完璧に」(*ibid.*) ことをこなす本能に対して、知性は全くそれとは逆の「道具」しか提示できないのである。なぜなら知性は、「道具」を作るにあたって、最も重要な契機である「事物に対する生得的な知」(EC 620) を十分持っていないのである。

本能は、有機体を道具とするため、行動する有機体の内に対象となる有機体に対する知を持っている。本能に従う動物は、生まれつき眼前にした対象が何ものであり、どのようにふるまえばよいかを知っているのである。ジガバチが、優れた解剖学者のようにほぼ正確に、

狙った神経節を刺して麻痺させることができるのは、対象となる有機体の持続を文字通り体得しているからに他ならない¹⁴。ベルクソンは「本能は共感である」(EC 645)としているが、対象の持続は行動を起こす有機体のまさに「内側から」(EC 643)感じられるものなのである。

これに対して知性の知は対象そのものに対する知を持たず、対象間の「関係 rapports」(EC 620)をのみとらえる。知性を持つ有機体である人間は、生命の持続が物質を貫流して生じた他の有機体と同様に物質的契機をも内に含んでいるが、持続と本質的に相対する物質との共感は十分なものではない¹⁵。物質を対象とする知性は、本能のように内から行動に必要な知を得ることはできないのである。そのため知性は、外的にしか物質をとらえることができず、物質を自身の行動に用いる際、ある一定の枠組みで解釈し、関係づけ、再構成する手続きをとるのである。このようにすることで、知性は、対象についてあくまで「仮言的 hypothériquement」(EC 621)な知、つまり「このような状態ではこのように」(*ibid.*)という認識をのみ獲得する。そのため、本能の知が直接的に作用するのに対して、知性の知は不足しており、「骨が折れる操作を要する道具」道具しか生み出せないのである。

しかし、この知性の知の不足は、知性の最大の特徴を示唆している。それは、直接的に特定の対象に対応することはないが、逆にどのような対象でも扱うことができる、という点である。知性の枠組みは可塑的であり、様々な仕方で対象を扱うことができるのである。本能に試行錯誤は存在しないが、知性は試行錯誤を続けることによって、自分たちの外部に存在するあらゆる物質を対象とし、その対象を何ものにも縛られることなく自由に扱うことができるのである。そして、その知性の思想上の作業の場こそ、空間の観念に他ならない。『試論』以来、空間は実在する延長と区別される「人間の知性の製作的な傾向を象徴する」(EC 628)ものなのである。空間は観念としてのみ存在し、知性の活動の場として様々な仕方で機能する。知性の基本的な働きとは、空間的な諸分節を対象に持ち込み、「不連続」(EC 626)の諸契機の集合体として対象を解釈し、道具として用いるものなのである。

そしてまた、知性には、本能には決して備わっていない特殊な働きがある。それは、「回顧的視点 vision rétrospective」(EC 696)を持つということである。知性は、物資を対象とするため、物質の性質を外部から知ろうとし、外部から物質の持続を観察する。先に見たように、物質の持続は「弛緩」した持続であり、過去と現在の相互浸透が弱まった持続である。物質に触れたとき、「精神自身の偶然的な弛緩について、つまり自身の可能的な広がりについて抱く感じ」(EC 666)として、精神は物質的な「弛緩」を自身の内に感じ取る。そして自身の内に「そうした運動が行きつくに違いない終端を図式化したもの」(EC 667)である空間の観念を抱き、その空間の観念の上で物質を弛緩しきったものとして扱う。この時、物質は持続せず、いわば時間的継起の外部に置かれ、「全てが与えられている」(EC 533)という機械論が物質の運動や変化を解明するものとみなされる。知性は、まさにこの

物質に対する見方を物質に限らず有機体を含めた全ての實在に妥当させようとするので、宇宙に新しいものをなにも見出さないし、「積極的なものを表象していない」(EC 673)。過去や現在の内に全てが与えられているので、与えられた諸契機を組み立て直せばよく、結果から原因を再構成する演繹的、分析的な推理こそが知性の本質なのである¹⁶。

4. 知性と意識

このような性質を持つ知性によって意識はどのようにして目覚めるのだろうか。知性が物質と共通の枠組みを持ち、回顧的に働くものであるなら、むしろ意識を眠り込ませるもののように考えられるが、ベルクソンは知性のどのような面に注目しているのか。

意識とは、生物によって実際遂行される行動を取り囲む、可能的行動性あるいは潜在的行動性の地帯に内在する光であることが分かるだろう。意識が意味するのは躊躇あるいは選択である。(EC 617)

本能の場合、特定の刺激に対して対応する行動を有機体が即座に展開する。しかし、知性は目の前にした対象を知性の枠組みで分析し、様々な可能的な行動の中で最も有益な行動を選んで返そうとする。先天的な知に頼ることができない知性は、試行錯誤的に自らがとるべき行動を選び出すのである。そして、その際に用いるのが、その有機体が保持している記憶内容である。『物質と記憶』で検討されたように、具体的な知覚は、純粹知覚を軸にして記憶イメージが浸透してできたものに他ならない¹⁷。我々の可能的な行動を補完するために記憶内容は、意識に立ち戻ってきたのである。身体は有用な行動を導く記憶内容とそうでないものを選び取るための契機であり、過去の浸透を促す契機である。本能的な行動は記憶内容の立ち現れを行動の迅速さとの確さを乱す要素として阻害するだろう。しかし、知性に基づく行動は、その知の不足ゆえに過去の記憶内容の相互浸透を引き起こす。こうして、過去と現在の質的多様性を持った持続が形成され、意識がまさに知性的有機体において目覚めるのである。

そしてさらに、有機体の構造からみれば、人間の複雑な神経組織は、一つの刺激に対して複数の選択肢を提示するという点で、意識の目覚めに不可欠な要素である。

動物において、脳が組み立てるに至る運動諸器官、または言い換えれば、動物の意思が身に付ける諸習慣は、これら諸習慣の内に描き出され、この諸メカニズムに蓄積された諸運動を遂行すること以外の目的を持たない。しかし、人間において、運動習慣は第一の結果と共通不可能な第二の結果を持つことができる。ある運動習慣は、他の運動習慣を失敗に陥らせ、そのことによって自動機械を手なづけながら、意識を開放するのである。(EC

651)

このようなことができるのは複雑さによってもたらされた人間の神経系、つまり端的に大脳の機能的変化によってなのであり、大脳の複雑さこそが他の有機体と人間とを根本的に区別する働きの物質的根拠となるものなのである。

その意味で、「意識は人間において何よりもまず知性である」(EC 721) とベルクソンが主張することは、これまでの主張となんら反するものではない。一見して知性は、生命の持続から見れば反対の方向に足並みをそろえたものであり、「生に対する本性的無理解を特徴」(EC 635) としている。知性は、非有機的な物質の中にいるときに我が家にいるかのような安らぎを感じ、持続する生命現象を前にすると「有機化されたものを非有機的なものに分解」(EC 632) しようとする。そのため、有機的なものを対象とした時、知性の枠組みが十分機能しないことを感じるのである。しかしそれだからこそ、知性は、意識を目覚めさせるきっかけを作ることができる。生命の持続がその「中断」や「反転」であるはずの物質の持続を貫流することで有機体を創造したのと同様に、一見して逆説的だが、知性は、生に対して無理解であるからこそ、知性の外部にある意識を目覚めさせるのである。

実際、知性は、ベルクソン哲学における「直観 intuition」において不可欠な契機でもある。

実際に直観は、一方では知性の仕組みを利用して知性の枠がここでは精密に適用されないことを示し、また他方では、知性の枠の代わりに何を置いたらよいか直観固有の働きで少なくとも漠然とを感じるくらいには示唆してくれるであろう。…(中略)…しかし、そのようなことで直観は知性を超えるにしても、直観をそうした位置にまで高めた衝力は、もっぱら知性から来たであろう。知性がなかったら直観は、いつまでも本能の形を保ち、自分と実際に利害のある特殊な事物にくぎ付けにされて、その事物によって外面化されたままで場所的な運動を続けたであろう。(EC 645-646、傍点は引用者による。)

『創造的進化』において本能は、「その本質的なものはありのままに生命過程なのである」(EC 636) と言われるように、生の持続を直接的に継承している。しかし、その対象の持続についての知を即座に定められた行動として発現させてしまうため、本能は生の持続の創造を継承しえない。本能と「互いに含みあって」いた知性の働きによって、意識が目覚めることで、初めて本能は「直観」に高まるのである。そして、この「直観」こそ、製作を超えた創造である「発明 invention」(EC 650) をなさしめるものである。「発明」は「新しいもの」(ibid.) を生み出す働きであり、直接的に生活の利益を生むという面では製作に劣ることもある。しかし、「発明があらゆる方向にまき起こした新しい考え、新しい感情」(ibid.) はそ

の生活上の利益をはるかに超えるものを我々にもたらす。生の持続の創造は、この「直観」に基づく「発明」に至ることで創造の継承が実現することになり、その点こそ「意識が自らを開放する」ことの真の意義があるのである。

5. 超意識と人間の意識の差異

以上、『創造的進化』の進化の過程をたどってきたが、最終的に進化の最初に置かれる「超意識」と人間にいたって目覚めた意識の差異は何であろうか。

まず、我々が眼前にするのは、人間の意識のあらゆる面での不足である。我々の意識は、「ある生物が空間内のある点に置かれて持つ意識」(EC 696)であり、それは有機体各々の中で働く「減退した意識」(*ibid.*)と同じものである。なぜなら、進化の初めに置かれていた意識は、生の様々な傾向性を内に含んでいた。しかし、進化の過程を確認した際に注目したように、それは分岐しているのであり、その全ての契機を人間の意識が所有することはない。つまり、進化の過程で「意識は途中で厄介な荷物ばかりを捨てたわけではない」(EC 721)とされ、人間において意識はもっぱら知性に向けられ、生活上の利益をもたらす製作にくぎ付けにされているのである。そのため生命進化の直接目的であり、生命の持続の「貴重な財」(*ibid.*)である「直観」を人間は容易になすことができない。人間の意識が「直観」を得ようとすれば、自らの「自然に暴力を加える」(EC 696)ような「苦しい努力」(*ibid.*)が必要とされる。こうした努力はわずかな間だけしか続けられないのであり、我々の日常生活において、ごくまれにしか行うことができない。「直観」がこのように苦しく短時間しか行うことのできないものである以上、「直観」に基づく「発明」も同様である。あたかも「多くの人々は真の自由を知ることなく死ぬ」(DI 110)かのように、「発明」もほとんど実践されないのである。

このようにみると、なぜ生命の進化が人間を進化の過程で生み出したのか、理解するのに困難を覚えるであろう。確かに意識は人間において目覚めるが、目覚めた意識は必ずしも創造に向かわないからである。

そこで逆に、人間において得られたものは何かに注目してみよう。ベルクソンが神経系の発達と同様に、意識の目覚めにおいて注目しているものは、言語の働きと社会の働きである。言語は、知性的契機であるがゆえに、本質的に持続を表すものではない。しかし、「知性は言語そのものが外的なものであることを頼りに、語に導かれて自分の作業の内に入り込む」(EC 630)。つまり、言語が、知性的な意識の働きに反省を促し、あたかも生の持続における物質であるかのように機能するのである。人間の言語は、あらゆるものを対象とすることができる「動的な記号」(EC 629)であることも、ここでは有効に働く。言語それ自体は、詩人が詩を創作する際に、詩人の詩の観念を十分に伝えるものではないかもしれないが、創作活動を促すことができる。実在的な物質の持続の存在、非存在にかかわらず、物質的な言

語表象を「道具」として用いることで、新たな意識の目覚め、創造はさらに広げられるのである。

次に、社会は、様々な可能性を秘めた契機である。ベルクソンは、「生は個性性の追求をはっきりとあらわしている」(EC 506)と述べる一方で、有機体の個性化が完全に完成しきっていないことを注意する。生が不可分な持続である以上、一個の個体的生が現出したとしても、それが生命の持続から全く没交渉的に存在しないことは時間的連鎖の面からも明らかなのである。このことは、個体的意識を目覚めさせる人間において、きわめて重要な意味を持つことは言うまでもない。人間の意識は、空間上に限定された身体とともに現出するものであり、本来、人間個人の行動に寄与するものである¹⁸。しかし、その個体的な意識は、全体から切り離されたものではない。ベルクソンは、「言語が思想を貯蔵するように、社会的生は努力を保存する」(EC 710)という。蓄積された創造の努力が、明示的に社会の歴史の中で積み重ねられ、その中にある個人の水準を向上させるのである。このことは、ベルクソンが自身の哲学に認めている「外から補われ完成されるゆとりさえ持つ」(EC 657)点においても明らかになる。実在する持続に迫らんとする哲学は、一挙に一個人の思弁によって完成するのではない。多数の事実から反省され、蓋然性を暫時増していくのである。「直観」に基づく哲学がこのようなものである以上、「発明」も社会から完全に独立した一人の天才によって生じるものであるとは限らない。講演「意識と生命」においてベルクソンは、芸術的な創作より上位にモラリストによる創造を取り上げ、そこでは自身の生の充実だけでなく、他者の生の充実まで触れられている¹⁹。この点は、後年の『道徳と宗教の二源泉』においても継承されるが、最も偉大な発明は、社会を介した人間の生そのものの「発明」であり、それがゆえに「死さえ乗り越えることができる」(EC 725) 人間的生は、個人ではなく人類全体に妥当するのである。個人的な意識は、社会を通してさらなる発展を遂げる可能性は残されており、その発展は、他の生物にはない独自のもののなのである。

6. 結

以上、見てきたように、宇宙論的な意識は、人間存在において意識が目覚めることをもって一つの頂点であるとみなす。しかし、この人間における意識の目覚めは、予定されていたものであろうか。ベルクソンの論述を見る限り、答えは違うようである。

生命は、本質的に物質を横切って放たれた流れであり、物質から可能な限りのものを引き出そうとする流れである。したがって、計画も計画予想図も存在していなかった。(EC 720)

生命進化の目的や終端と呼ばれてはいるが、最初から人間を生み出そうと生命の持続が働

いたわけではなく、「偶然 contigence」(EC 711)²⁰、他の仕方でもありえたように働いた結果、人間において意識は目覚めたのである。そのため、我々が知るような仕方での生命進化が必然的であったわけではなく、極端な場合、「生命は本来的に有機体と呼ばれるものの内に、自らを集中させ、明らかにする必要さえない」(EC 712) ことさえも権利上想定できるとベルクソンは言うのである。

ベルクソンにとっての生命は、エントロピー理論が想定する、宇宙におけるエネルギーの崩壊を防ぐか遅らせることを主たる目的として持っているのみで、意識を目覚めさせることすら、その目的にかないうえに別なあり方をしていてもよかったのである。人間に見られる意識が、優れて創造的であるがゆえに、宇宙論的意識がその目覚めを受け入れただけのことである。その意味では、ベルクソンが、宇宙論的意識に対して、「これ以上に適した言葉がないので」(EC 696) と断っていたこともここで思い出されるべきだろう。超意識は創造の原理であり、創造の産物である人間の意識と連続はしていても同一のものではないのである。このベルクソンの主張から、生命進化の果てに知性を持った人間が現れ、その場において意識が目覚めがあったのは、偶然的であったと結論すべきであろう。当然それは、同じ意識という語が用いられたとしても、閉じた円のように、元のものと同じ性質を持って現れるものではないのである。人間の意識は、有限な身体を持つことでしか現れることができない。それは超意識の創造と比べるとはるかに弱い創造をしかもたらさず、その活動は時として知性的製作の前に屈してしまうだろう。しかし、一方で知性によって目覚めた意識は、非有機体に対して、それまでの創造とは違った創造を、複雑化した大脳、言語、そして社会といった契機を通してもたらすことができる。あらかじめ決められていたわけではないにしても、新たな創造をもたらすことができるという意味で、生命の進化の結果として知性によって目覚めた意識には十分な存在意義があったのである。

¹ 本論文で使用したベルクソンのテキストは、Bergson,H.1991,*HENRI BERGSON ŒUVRES* 5^eédition, Presses Universitaires de France収められている著作、論文を使用した。以下、引用箇所や参照箇所のページ数は、以下の略語を用いて明記する。また、引用箇所中の強調は全て著者によるイタリック表記のものであり、傍点によって強調した。

Essai sur les données immédiates de la conscience…DI

Matière et mémoire…MM

L'Évolution créatrice…EC

Les deux sources de la morale et de la religion…DS

L'Énergie spirituelle…ES

² 『試論』では物質は持続していない。DI 80に特徴的なように、我々の意識の外的世界における運

動や変化は、それを観察する人間の意識に依存している、という主張が『試論』段階でのベルクソンの主張である。

³ 『物質と記憶』の初版序文は、第三章の「意識の諸平面」の検討を中心とする旨が指示されている。MM1490-1491 参照。

⁴ 『物質と記憶』第四章についての論考に松垣の検討がある。松垣は、『物質と記憶』の論理構成において、過去の記憶の独自存在と固体に対する働きかけの議論が、『創造的進化』で展開される発生論的議論を必然的に必要とする可能性を指摘している。松垣立哉、2017、「過去はなぜそのまま保存されるのか」、平井靖史、藤田尚志、安孫子信 編、『ベルクソン『物質と記憶』を診断する』、書肆心水、pp.99-109参照。

⁵ ベルクソンが『創造的進化』において、「超意識」と並んで、「超 sur-」とう接頭辞を加えているものがもう一つある。それが「超人 sur-homme」(EC 721)である。ベルクソンは、「あたかも、好みに応じて人間とも超人とも呼ぶことができるような、はっきりしないほんやりとした存在が、自らを現実化 réaliser しようと試みて、その途中で自分自身の部分を放棄することでのみ、現実化するにいたったかのように、全てが進行する」と述べている。この部分に、超意識と人間を比喩的に結びつけることができる。この点について、Wormsは、『創造的進化』と『道徳と宗教の二源泉』への接続を意識しながら、ニーチェの超人論を並べながら人間の位置づけについて触れている。Worms,F.,2004,*Bergson ou les deux sens de la vie*, Presses Universitaires de France, pp.246-252参照。

⁶ 『持続と同時性』の時間の複数性の検討は、中根弘之、2009、「持続の多様性について」、『東洋大学院紀要』第45集、pp109-121参照。また、また古典的検討として、宇宙論的持続についてドゥルーズによる「持続は一か多か」という問いかけがある。Deleuze, G., 1968,*Le Bergsonisme*,pp71-91. 参照。

⁷ 予見不可能な新しさを持続が生み出す最大の理由は、記憶力による過去の残存である。過去が残存し、現在に浸透する限りで、同一の事象が繰り返されたとしても、「一回目」と「二回目」では、質的变化をもたらすのであり、持続するものは新しいものの湧出でしかありえない。むしろ、ベルクソンの宇宙論から見た場合、本来新しいものが生まれるのに抵抗して、同一のものが繰り返されると考える理由のほうが特異である。

⁸ 有機体という「物体 corps」が存在すると考えることは、『物質と記憶』第四章の検討(MM 332-337)から見ても適切ではない。

⁹ ベルクソンによる目的論的進化論と機械論的進化論の批判については、『創造的進化』第一章の大テーマである。その中でもEC 542,546 参照。

¹⁰ 「環境への適応」という概念について、ベルクソンは検証している。EC 543-546 参照。

¹¹ この表現はまさに『物質と記憶』第一章の身体イメージにおいて用いられていた考えであり、他のイメージに対して「私の身体イメージ」を介してしか真に新しいものは生み出されない

ことが述べられている。MM 170 参照。

¹² しかし植物であっても何も付け加えないわけではない。なぜなら拡散して消失してしまうエネルギーをおしとどめるというだけでも生命の持続の意義が認められる。EC 292 参照。

¹³ 具体的にこの四つの方向とは、「棘皮、軟体、節足、脊椎」の四つであることが触れられ、袋小路は前者二つ、本能行動に特化するのの後者二つとされている。とりわけ本能については節足動物に属する種々の膜翅類の行動にベルクソンは注目している。EC 605 参照。

¹⁴ 本能を持つことで対象の持続を感じ取ることができる理由は、生命の進化において、諸傾向は分岐しつつも他の傾向を潜在的に所有しているからである。極端に言えば、植物であっても知性的傾向を共有することができ、また逆に人間において本能が全く消え去ったものではないことをベルクソンは示唆している。EC585参照。

¹⁵ 物質との共感可能性は完全に否定されるものではないだろう。実際、物質を対象とした「発明」は、我々の世界では普通に行われていることだからである。しかし、知性による認識は、外部からとらえることを特徴としており、むしろ対象の外部に人間の意識を引き出すがゆえに、意識の目覚めを引き起こすとされる。EC 632 参照。

¹⁶ 帰納法もここでは演繹法に還元されることが指摘され、積極的なものはつけ加えられていないと注意されている。EC 674-681 参照。

¹⁷ 『物質と記憶』においてベルクソンは運動そのものを、記憶イメージの再生を阻害するものと考えている。この点については『物質と記憶』の第二章と第三章、とりわけ、MM235-244, 311-314参照。

¹⁸ 個体な意識が必然的にエゴイズムに陥ることについては、『道徳と宗教の二源泉』で触れられる。この点については、中根弘之、2011、「ベルクソン哲学の悪の問題における知性と個」、実存思想協会編『実存思想論集X X IV 思想としての仏教』（第二期十八号）、pp117-134参照。

¹⁹ 人間の生における社会の意義は、1911年の時点で注目され、さらに、『道徳と宗教の二源泉』において強化されたといえるだろう。ES 833-835, DS 1223-1234 参照。

²⁰ この「偶然」に対するベルクソンの主張は、同じ『創造的進化』第三章の「無秩序」についての考察（EC 681-696）と比較すると、非常に興味深い。ベルクソンは、進化における偶然性を一方で肯定しながら、無秩序を秩序の否定であるとして誤った概念であると指摘している。ベルクソンの目的論の観点から、ここでの偶然性と無秩序の問題は改めて研究テーマとして取り上げたい。

Sur la conscience humaine et la durée vivante

NAKANE, Hiroyuki

Dans *L'Évolution créatrice*, Bergson dit que chez l'homme, et chez l'homme seulement, la conscience se libère. La conscience qui est l'origine de l'évolution de la vie, en traversant un monde matériel, dégage les organismes selon les tendances de la durée. L'homme a sauté seulement l'obstacle matériel qu'endormit la conscience. Quel est la différence entre «au débat» et «au terme» de la conscience dans l'évolution, et entre la conscience originelle et la conscience humaine ?

C'est par l'intelligence que la conscience humaine se distingue de la conscience originelle. Bergson dit que chez l'homme, la conscience est surtout l'intelligence. Par essence, l'intelligence est dirigée sur la fabrication de l'instrument matériel, et est caractérisée par une incompréhension de la durée. Mais, l'intelligence est paradoxalement la cause de la libération de la conscience. C'est parce que l'intelligence ne fournit que les connaissances insuffisantes de l'objet au homme. Chez l'homme, l'écart surgit entre les stimulations d'objet et les actions d'organisme. Plus le cerveau humain qui est la base organique de l'acte intelligent est se complexifié, plus l'écart grandit. La conscience glisse dans cet écart, et déploie l'indétermination sur les acts humaines. Le langage et la société qui sont gagnés par l'intelligence n'endormit pas la conscience humaine et oriente l'homme à la création. À la différence de la conscience originelle, la conscience humaine est réveillée par l'intelligence.

mot-clefs :

évolution, creation, conscience, intelligence